

中臣遺跡発掘調査概報

昭和62年度

京 都 市 文 化 観 光 局

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序

西暦 794 年、平安京遷都とともに政治、文化の中心都市として千年以上も存続し続けてきた京都は、現在も大都市として躍進を続ける世界でも極めて希な都市であります。

昭和62年秋には、世界各国の著名な歴史都市の代表者が一堂に会し、世界歴史都市会議が京都市で開催されました。

会議では世界の歴史都市が持つ都市計画論、文化遺産論、都市産業論等の諸問題が討議され、また世界の古い歴史を有する都市において歴史都市会議を継続的に開催することが決議されるなど大きな成果をもって閉幕いたしました。

各々の歴史都市は、埋蔵文化財とは切っても切れない関係にあることが多く、市街地の中央に平安京跡を抱える京都市は、歴史都市の持つ典型的な実例であり、遺跡の保存と開発との調和が常に都市計画における重要な課題となっております。

京都市内で行われる数多くの埋蔵文化財調査では、考古学上貴重な成果を得ることも多く、京都の歴史や変遷を知る上から欠くことのできない貴重な発見が相次いでおります。

この概要報告書は、昭和62年度に(財)京都市埋蔵文化財研究所に委託して実施いたしました、文化庁国庫補助を伴う埋蔵文化財調査報告であります。調査にあたっては数多くの方々の協力を賜り、また文化庁をはじめ多数の方々の御指導を受けました。

御協力いただいた方々に深甚なる御礼を申し上げますとともに、この報告書が京都の歴史をより深く知る資料として大いに活用されることを切に願うものであります。

昭和63年 3月

京都市文化観光局

例 言

- 1 本書は、昭和62年度文化庁国庫補助事業における中臣遺跡発掘調査の概報である。
- 2 発掘調査は、京都市文化観光局が財団法人 京都市埋蔵文化財研究所に委託し、同研究所がこれを実施した。
- 3 発掘調査は2箇所実施した。調査次数は68次・69次調査である。
- 4 図中に使用した方位は、平面直角座標系Ⅵによる。
- 5 標高は、海拔高T.P.を使用した。
- 6 本書中の地図は、京都市の承認を得て、京都市計画局発行都市計画基本図（2500分の1）・勸修寺を修正して使用した。
- 7 本書中の写真は、遺構・遺物とも牛嶋 茂が撮影した。
- 8 68次・69次調査、本書の執筆・編集は平方幸雄が担当した。

本文目次

I	68次調査	
	1 調査経過	1
	2 遺構	1
	3 遺物	3
	4 まとめ	5
II	69次調査	
	1 調査経過	6
	2 遺構・遺物	7
	3 まとめ	8

図版目次

図版一	遺跡	調査位置図	
図版二	遺跡	68・69次調査区周辺主要遺構位置図	
図版三	遺跡	1 68次全景	2 1号住居址全景
図版四	遺跡	1 69次全景	2 建物1

挿 図 目 次

図 1	調査区平面図	1
図 2	1号住居址実測図	2
図 3	1号住居址カマド実測図	2
図 4	各遺構出土土器実測図	4
図 5	69次調査区実測図	6

I 68次調査

1 調査経過

調査地点は、山科区勸修寺東金ヶ崎38-4に所在する。周辺では、これまでの発掘調査で弥生時代後期以降の竪穴住居址をはじめとする集落を構成する遺構群が多数検出されており、当該地にもこれらの遺構群が存在していることが想定されていた。このように想定されている地点に住宅建設が計画されたため、市埋文センターは設計業者等と協議し、遺構等の有無を明らかにするための試掘調査を行なうこととなった。試掘調査の結果、遺物を包含する層を認めたことで再度、業者と協議を行ない発掘調査を実施する運びとなった。

調査地点は、段丘崖から西南へ約70mほど旧安祥寺川寄りに位置する。調査対象地の面積は約350㎡あり、ほぼ対象地全面を調査した。調査区の基本層序は、業者が事前に60~70cmほど土盛した積土下に、耕土・床

土が25~30cmあり、西南半ではその直下が地山(黄灰色泥土)である。東北半では床土下に古墳時代後期の遺物を包含する黒褐色砂泥層が10cmある。さらにその下部に縄文土器(晩期)・土師器(古墳時代前期)を包含する暗茶褐色泥土層が10~15cm堆積する。

2 遺構

遺構は、暗茶褐色泥土および黄灰色泥土面で検出した。主な遺構には、竪穴住居址1戸、溝1条、土壇1基がある。その他に、ピット・土壇状落ち込みなどを検出した。

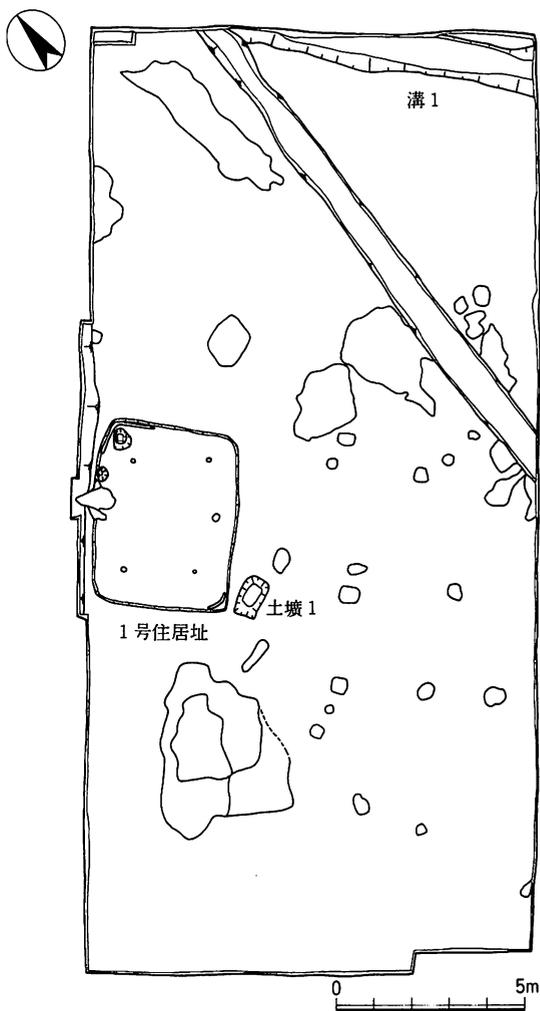


図1 調査区平面図

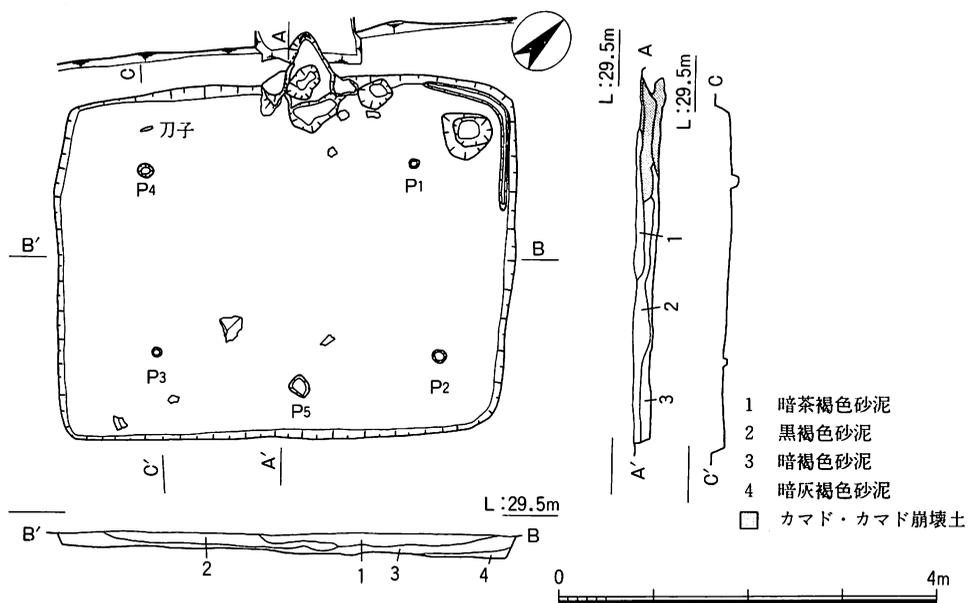


図2 1号住居址実測図

1号住居址 調査区の中央、西北壁に接する位置にあり、黄灰色泥土面で検出した。平面形は東北—西南方向にやや細長い長方形を呈する。検出面で長軸4.82m、短軸3.78mあり、床面までの深さ10~25cmある。壁溝は北角付近の一部にのみ認められ、上幅6~8cm、床面からの深さ3~5cmある。柱穴は、5箇所あり、径10~22cm、床面からの深さ4~12cmある。このう

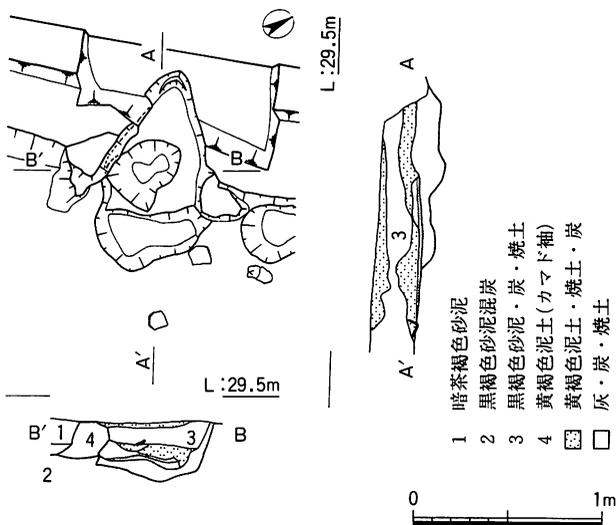


図3 1号住居址カマド実測図

ち、主柱穴と考えられる柱穴はP1~P4で、柱間隔はP1から右廻りで2.03・2.98・1.90・2.82mある。西北壁のほぼ中央付近にカマドを付設する、カマドは焚口部・燃烧部・煙道部・袖部を検出した。焚口部—煙道間で100cm、燃烧部幅50cm、袖頂部から燃烧部底まで28cmある。貯蔵穴が北角付近に1箇所あり、不整形な方形を呈し、二段落ちである。

長軸53cm、短軸48cm、床面からの深さ21cmある。遺物は、床面およびカマドなどから土師器甕・杯・椀(図4 8~12)・甑、須恵器杯(図4 13・14)、刀子などが出土した。

溝1 調査区東北隅、暗茶褐色泥土面で検出した、西北―東南方向の溝である。断面形は逆台形を呈し、検出面で上幅100~110cm、深さ20~30cmある。遺物は土師器甕、須恵器甕・壺・杯(図4 6・7)が出土した。

土壌1 1号住居址の東南、黄灰色泥土面で検出した土壌である。平面形は不整な方形を呈し、検出面で長軸106cm、短軸74cm、深さ22cmある。遺物は弥生土器壺・甕・高杯・器台(図4 1~5)などが出土した。

3 遺物

遺物は、各遺構および遺物包含層から縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、鉄器などが、遺物整理箱で4箱出土した。このうち、1号住居址・溝1・土壌1から出土した主な遺物を図示した。なお、遺物包含層から出土した縄文土器は突帯文を有する晩期の深鉢であるが、細片のみであった。

弥生土器

壺(1・2) (1)は短かく直立する口縁部片で、外面はハケメ調整の後、ヨコナデを施す。(2)は1の形態を有する壺の体部下半で、内外面をハケメ調整する。1の口径10cm。

甕(3) 口頸部がくの字状に外反し、肩の張らない器形である。内外面をハケメ調整し、外面の頸部以下はヘラケズリを行なう。口径14.3cm。

高杯(4) 外方に開く脚部の小片で、内外面にヨコナデを施す。

器台(5) 円筒形の筒部で、筒部の下方に円孔を4箇所に配する。外面は丁寧なヘラミガキを施し、内面はハケメ調整する。

土師器

甕(8~10) (8)は口縁部の中程でやや内弯し、外上方に開く口縁部とやや肩の張る胴部からなる。口縁端部は、いわゆる匙面を呈する。(9)は口縁部が内弯し、外方に大きく開く口縁部と肩の張らない胴部からなる。口縁端部は匙面を呈する。8・9ともに内外面をハケメ調整し、口頸部をヨコナデ仕上げする。(10)は口縁部が外反し、肩の張らない胴部からなる。口縁端部は丸くおさめる。外面はハケメ調整を行ない、頸部以下の内面はヘラケズリする。口径21.4・21.5・16.7cm。

杯(11) 外上方に開く体部と口縁部からなる。口縁部内面にハケメを施し、底部外面はヘラケズリする。口径12.1cm、器高3.6cm。

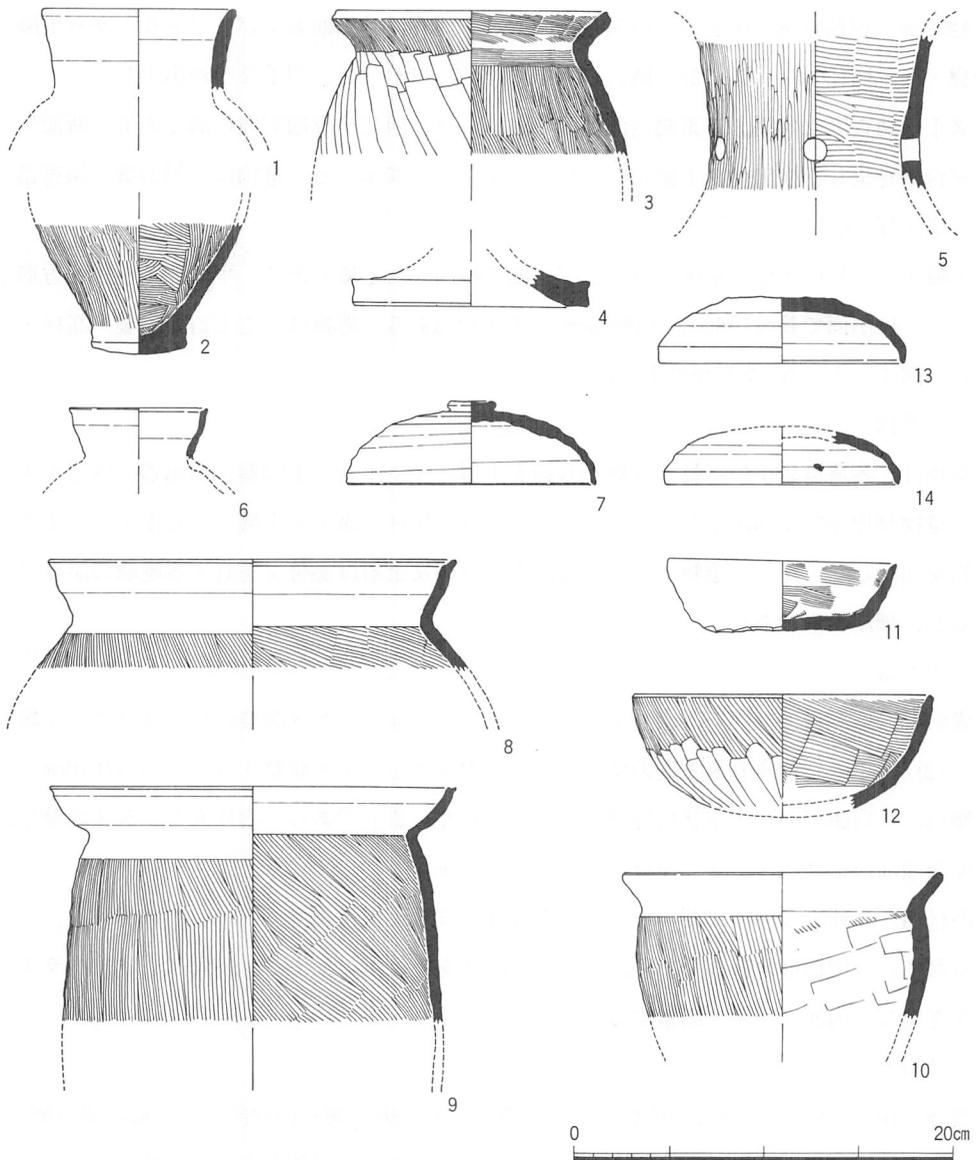


図4 各遺構出土土器実測図

椀(12) ゆるく内弯気味に外上方に立ち上がる体部と口縁部からなる。内外面をハケメ調整し、体部下半をヘラケズリする。口径15.7cm。

須恵器

壺(6) 中程でゆるく屈曲して外上方に立ち上がる口縁部である。口径7.2cm。

杯蓋(7・13・14) 7は偏平なつまみがつき、天井部をヘラケズリする。13は天井部は

不調整のままである。口径13・12.8・12.3cm、7・13の器高4.4・3.5cm。

4 まとめ

主な遺構の時期は、出土遺物からみて土壙1が弥生時代後期、溝1が6世紀中頃以降、1号住居址が7世紀前半頃と考えられる。

1号住居址は、古墳時代後期に形成され周辺一帯に展開する^{註1)} 竪穴住居址群を構成する一部である。また、溝1は同時期の集落を区画する溝ないしは用・排水路的性格をもった溝と考えられる。

古墳時代後期～飛鳥時代の集落のうち西南側グループを構成する竪穴住居址は、今次調査分を含めて31戸検出している。これらの竪穴住居址に付設されているカマドの付設位置についてみると、竪穴住居址の西北壁に付設されるもの15、東北壁に付設されるもの8、西南壁に付設されるもの2、西壁に付設されるもの1、不明5となる。集落の全体像が不明な現段階でこのような集計を試みることは自体やや無意味であるとも考えられるが、これまでの調査は西南側グループの中で、結果としていわばアトラダムな地点の調査となっており、竪穴住居址に付設されるカマド位置のおおよその傾向を知ることができる。しかし、竪穴住居址相互が近接した位置、時期にあつてカマド付設位置(方向)が異なる例あるいは同一方向に付設される例があるなど、そのあり方は一様でなく、このような現象面の背景について様々な想定も可能であるが、今後の調査に期待するところ大である。

註1) 昭和58年度の概要報告で西南側グループとした集落。『中臣遺跡発掘調査概報』

昭和58年度 京都市文化観光局

Ⅱ 69次調査

1 調査経過

調査地点は、山科区勸修寺西栗栖野町12に所在する。当該地に住宅建設が計画されたことにより、遺構の有無を確認するための試掘調査を実施した。その結果、古墳時代後期以

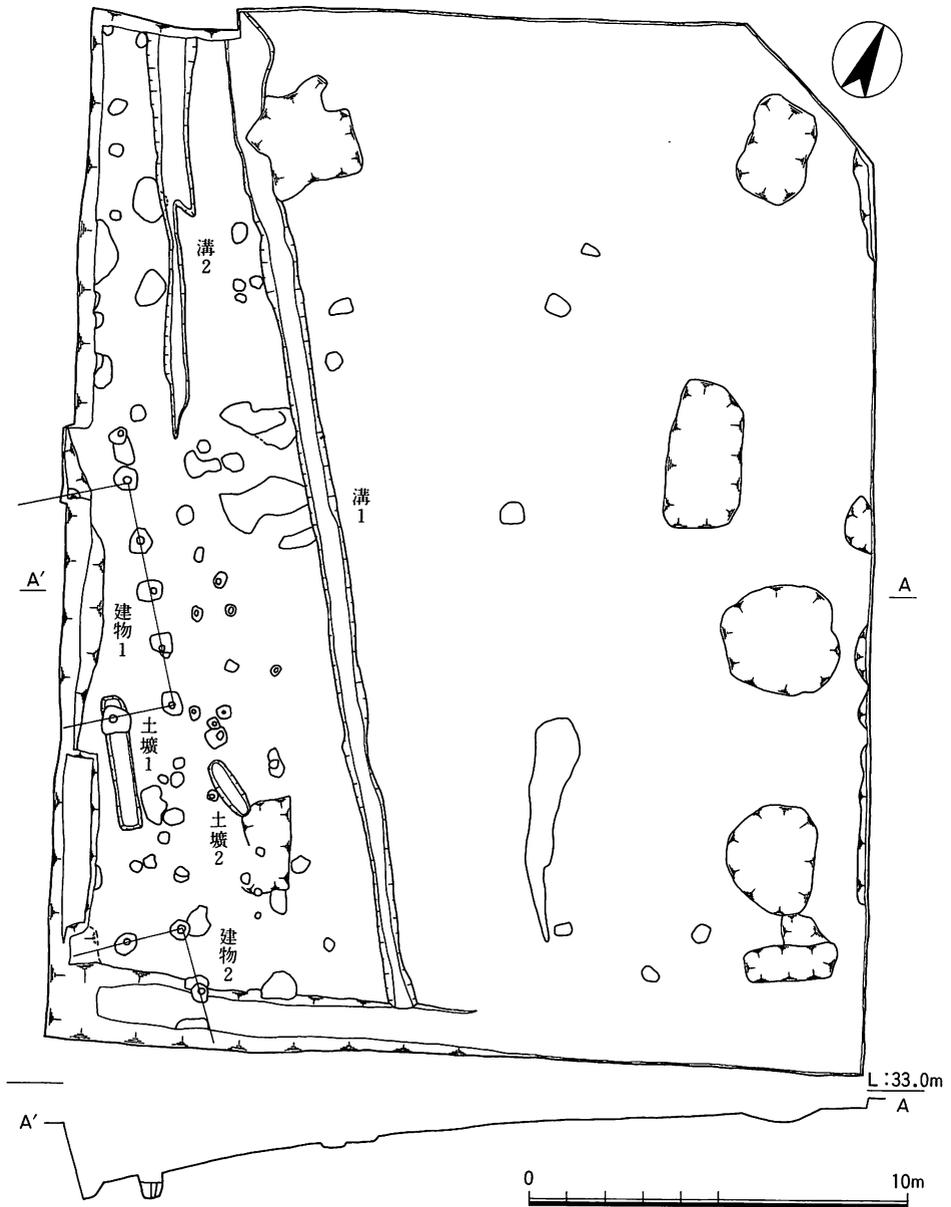


図5 69次調査区実測図

降の遺物を包含する層を確認した。周辺では、これまでの発掘調査で7世紀前半以降の竪穴住居址、掘立柱建物など(5次・43次調査)を検出している。試掘調査の結果とこれまでの調査成果からみて、当該地にも同時期の集落を構成する遺構が、存在していると予想できたことで、発掘調査を実施した。調査対象地の面積は約700㎡あり、対象地のほぼ全面を調査した。

調査地点は、段丘崖に接する段丘の高位面(栗栖野丘陵と一般に呼称されている)に位置する。調査前の地形は、区画整理事業による整備・整地が既に行われており、東から西に向かってなだらかに傾斜する状況を呈していた。調査の結果、本来の地形は調査区の中央付近で東北から西南に向かってかなり急な傾斜を示し、南隅付近では段丘崖の一部があらわれた。調査区東北側では、現耕土下が地山の黄灰色泥土であったが、西南隅付近では上から現耕土・積土・旧耕土(層厚約120cm)、黒色砂泥(約60cm)、黒褐色砂泥(約15cm)、黄灰色泥土(地山)の順に堆積する。黒色砂泥からは、7世紀前半頃の遺物が出土した。

2 遺構・遺物

遺構は、黒色砂泥および黒褐色砂泥面で検出した。主な遺構には、掘立柱建物2棟、土壇2基、溝2条がある。その他にピット、土壇状落ち込みなどを検出した。このうち、溝1・2とした溝は、出土した遺物からみて室町時代以降の用排水路的な性格が考えられる。

建物1 調査区の西南隅付近で検出した。梁行1間以上×桁行4間の建物で、西半は調査区外に延長する。柱間は、梁行・桁行ともに1.5m等間である。柱掘形はいびつではあるが一辺50～70cmの方形を呈し、径15～20cmの柱痕跡が認められた。各柱穴の深さは検出面から50～80cmある。なお、方位はN37°Wである。

建物2 建物1の東南で検出したが、建物の大半は調査区外に延長する。柱間は東南方向で1.4m、西南方向で1.7mある。柱掘形は、楕円形ないしは方形を呈し、径40～60cm、検出面からの深さ45～50cmある。なお、方位はN40°Wである。

土壇1 建物1と重複した位置で検出した。平面形は長方形を呈し、長軸356cm、短軸55～60cm、検出面からの深さ48～65cmある。埋土は、3層に分層できるが自然堆積の状態であった。遺物は奈良時代の土師器甕・杯、須恵器平瓶、鉄器の小片が微量出土した。

土壇2 土壇1の東側で検出した。平面形は、長楕円形を呈し、長径162cm、短径52cm、検出面からの深さ15cmある。埋土中に焼土塊を壇底より5cmほど浮いた状態で検出したが、土壇は加熱を受けた痕跡は認められなかった。遺物は平安時代前期の土師器杯が出土した。

遺物は、各遺構および黒色砂泥から古墳時代後期(終末頃)の土師器甕、須恵器甕・杯・

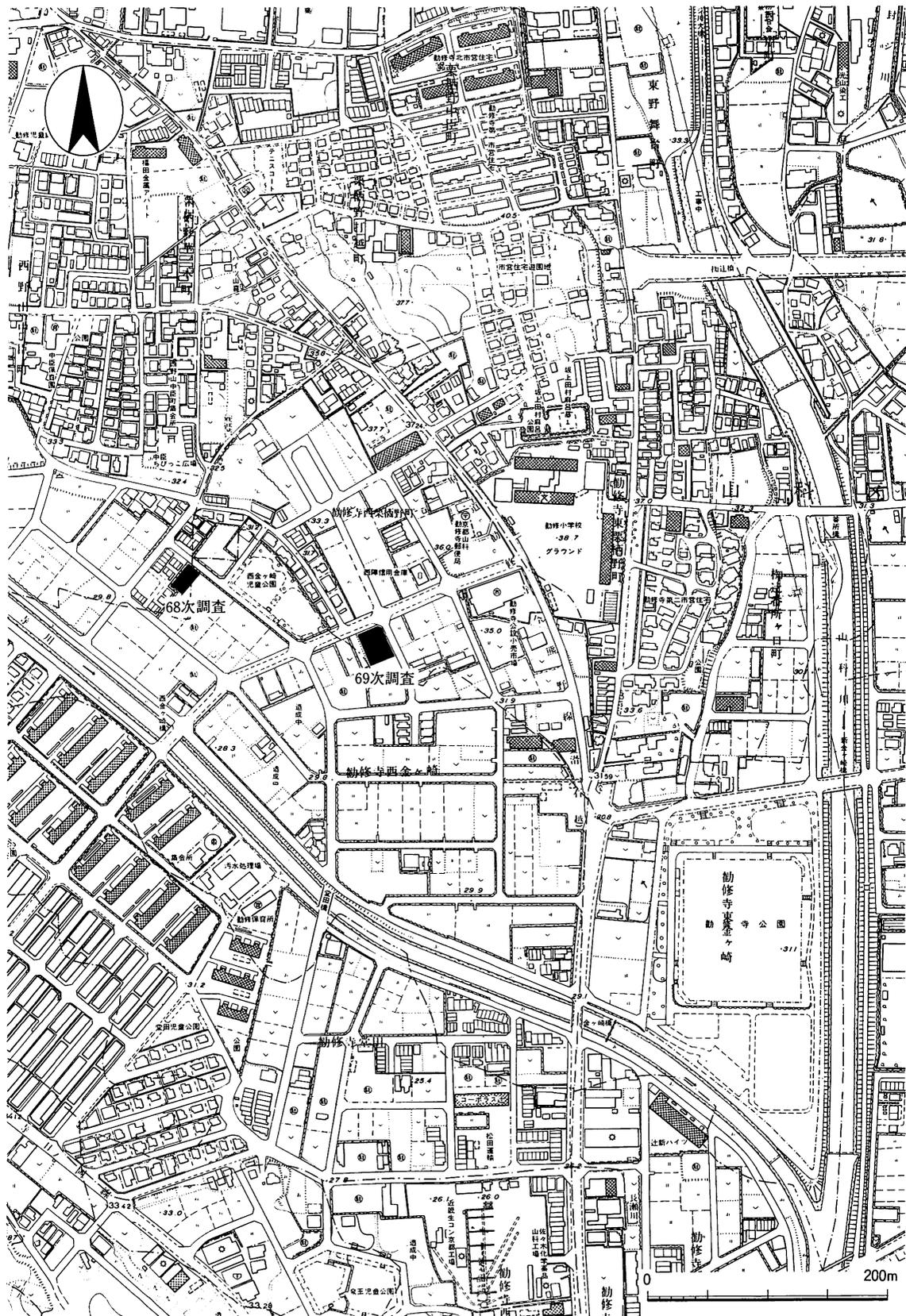
高杯、奈良時代の土師器甕・杯、須恵器平瓶、鉄器、平安時代の土師器杯、室町時代の土師器皿などが遺物整理箱で1箱出土した。なお、出土した土器は全て微・小片であり、図示しなかった。

3 まとめ

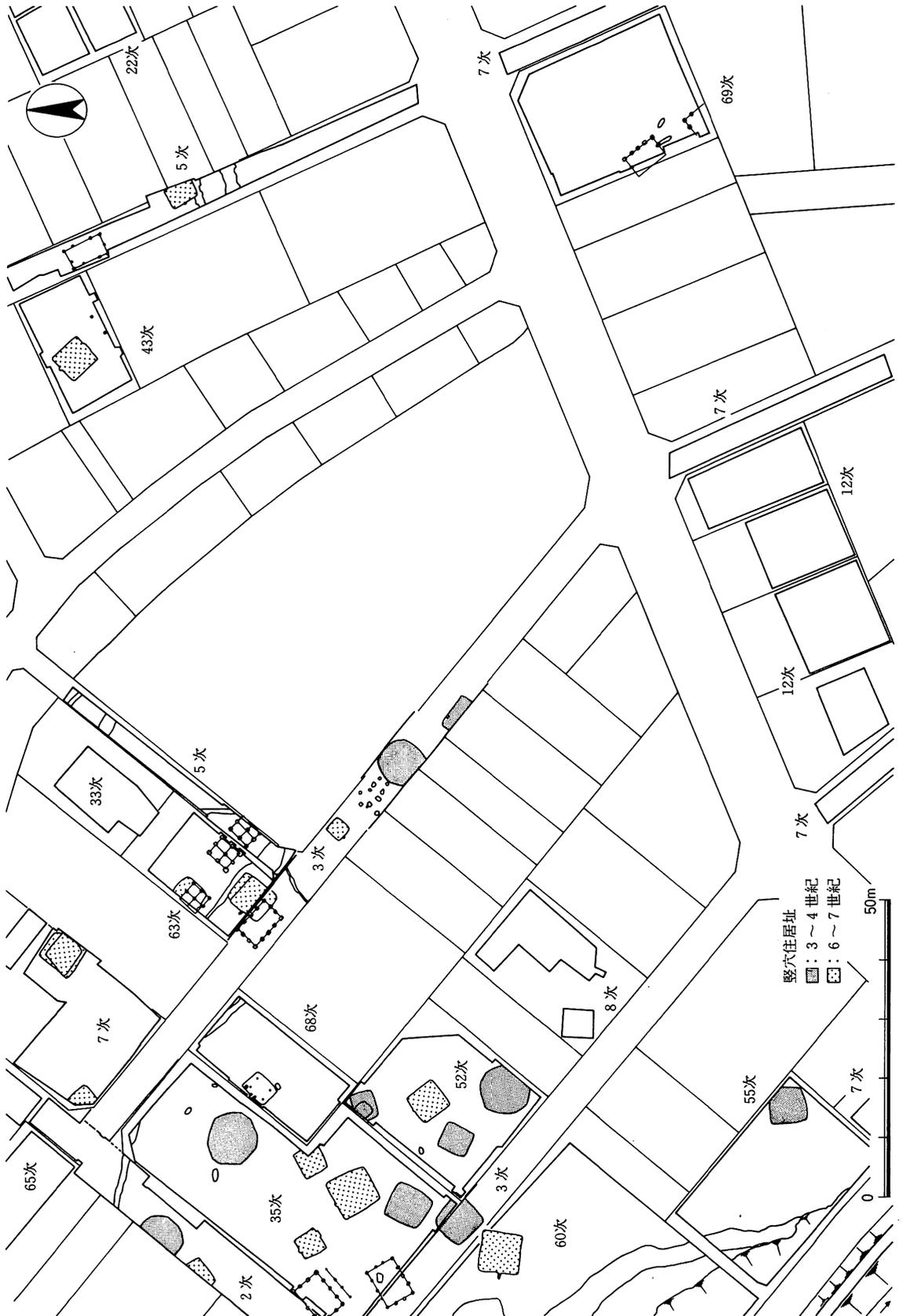
検出した主な遺構のうち、建物1・2の時期は、柱掘形から土師器の微片が出土したのみで遺物からでは判断できないが、建物1は奈良時代の土壇1を切って建てられていること、また焼土塊を有する土壇2との位置関係などからみて平安時代前期頃と推測できる。また建物2は建物1とほぼ同様な方位を示すことから近接した時期が考えられる。

段丘の高位面(栗栖野丘陵)では、これまで古墳時代後期の終末頃から集落が営まれ、奈良時代まで継続することがしられていた(5次・43次・44次調査)。今次調査で奈良時代以降(平安時代前期?)の建物跡を検出し、集落の存続期間がかなり長期間にわたると想定できる。しかし、集落の全体像を描けるまでには至っておらず今後の課題である。

圖 版



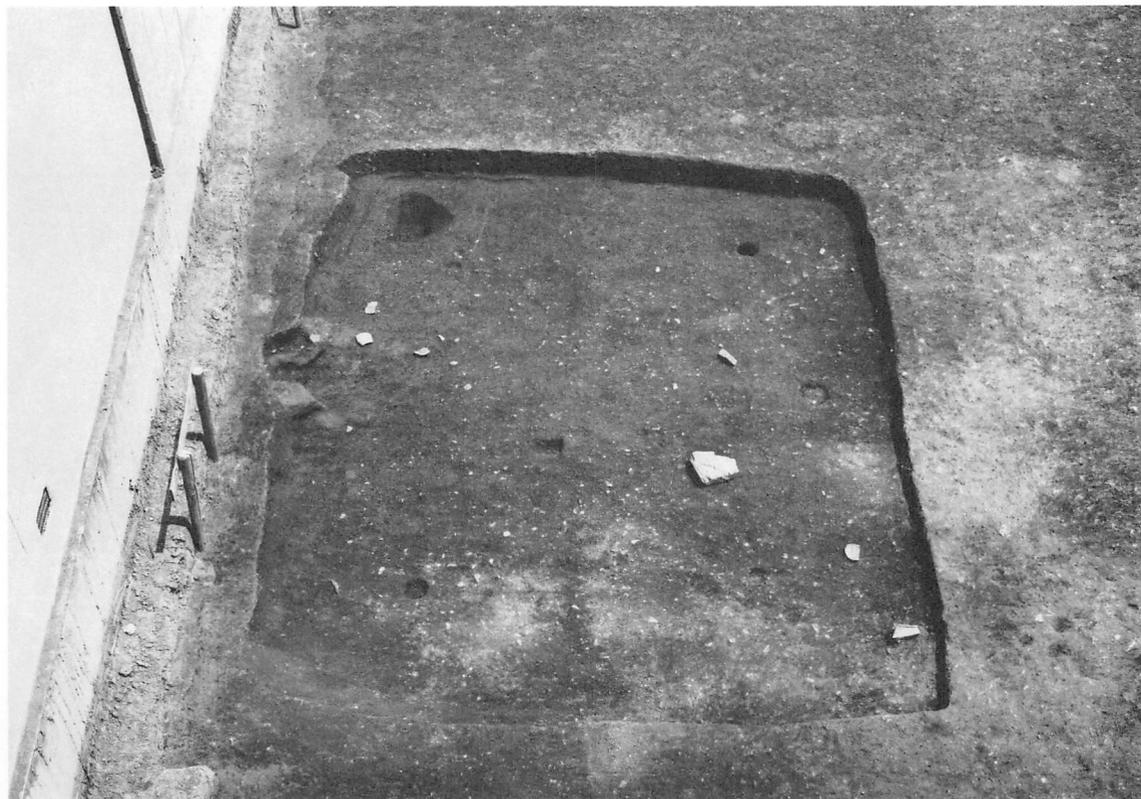
調査位置図



68・69次調査区周辺主要遺構位置図



1 68次全景（東北から）



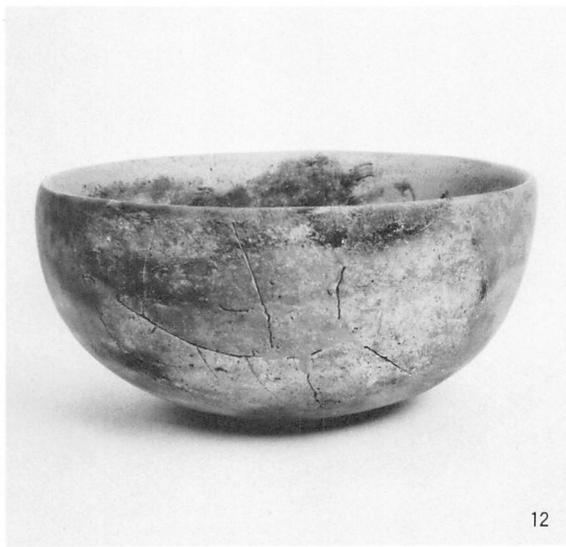
2 1号住居址全景（西南から）



1 69次全景（西北から）



2 建物1（北から）



中臣遺跡発掘調査概報

昭和62年度

発行日 昭和63年 3月31日

発行 京都市文化観光局

住所 京都市左京区岡崎最勝寺町13京都会館内

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川大宮東入ル元伊佐町
TEL (075) 415-0521

印刷 真陽社